名探偵コナン~中学生の名探偵~(仮)

熾天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名探偵コナン~ 中学生の名探偵~ （仮）

【Ｎコード】
Ｎ５７３５Ｖ

【作者名】
熾天

【あらすじ】
不定期連載！！中学生になったコナン達の話を書こうかな、と思います。
＊初投稿です。ＣＰは一応（ここ重要）コ哀です。苦手な方は読まないように

プロローグ（前書き）

作者は名探偵コナンを完全には読んでおらず、至らぬところも多々ありますがご了承ください。

プロローグ

「コナンくーーん！！　早く行かないと遅刻するわよーー！！！」

「分かってるよ、蘭ねーちゃん」

歯を磨きながら生返事をする。時刻は午前7時４０分、支度して行かないと本当に遅刻する。

「入学式当日から遅刻なんて恥ずかしいわよー？」

ははは、姉が入学式に来る方が恥ずかしいぜ……

なんて思いながら学校に行く準備をしていると一枚の写真が床に落ちた。

あれから、もう六年か………

大きくなった自分の体を見るとどこか寂しさが込み上げて来る。

「コナンくーーん！！　本当に遅刻するよ！！」

蘭の声で我に帰った。時計を見れば既に7時５２分、本格的にヤバくなっていた。

「いけねっ！！　もう時間ないじゃん！！　いってきまーす！！」

慌てて鞄をひっ掴み、毛利探偵事務所から駆け出した。今日は、記念すべき帝丹中学校の入学式だ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――

「はぁ、はぁ、あー……ギリギリだ」

街中を全力で駆け抜けなんとか間に合った。入学式早々に遅刻では元太達に笑われてしまう。

昇降口のところで自分のクラスを確認する。江戸川なのですぐに見つかった。見つけたら後は教室へ急ぐだけ、時間は８時１５分本当にギリギリだ。

「えー、皆さんはじめまして。今年一年担任を務めさせていただく竹林孝太郎と言います。よろしくお願いします。これから入学式なので、指示があるまで教室で待機していてください」

教室に駆け込んだと同時に先生がそんな事を言っていた。幸い出欠は入学式後だったらしく去り際に先生が笑って教えてくれた。

「コナン君！　珍しいね遅刻なんて」

「ああ、ちょっと寝坊しちまってよ。それより歩美ちゃん、またおんなじクラスなんだな」

「私だけじゃないよ、みんな一緒なんだから！」

そう歩美に言われてクラスを見渡すと、確かに元太や光彦の姿がある。

「灰原は？」

「呼んだかしら？」

元太や光彦の姿があっても灰原の姿が見えなかったので歩美に聞こうとしたら、背後から声が聞こえた。

「オメー、いつからそこにいたんだよ？」

「歩美ちゃんの『みんな一緒なんだから』あたりからよ？」

オレ達のやり取りを見てか、歩美がクスクス笑っている。すぐ後ろには少し残念そうな光彦と嬉しそうに笑う元太がいた。

「どうしたんだよ歩美ちゃん」

「私達ちょっと賭けしてたのよ」

「賭け？　なんのだよ？」

「コナン君が『最初に灰原は？』って言うかどうかですよ。僕はもしかしたら言わないかもと、大穴を狙ったんですけど残念ながらハズレてしまいました」

「おいおい、勝手に人を賭けのネタにすんなよな……」

自分の行動が先読みされてるようであまりいい気がしなかった。光彦や歩美の後ろで『ジュース一本オゴリな！』と元太が言ってるのを聞くと気持ちが落ち着いた。

こんな光景も変わらないなと、朝見た写真のせいかそう思った。

第一話・女子大生殺害事件（1）（前書き）

色々と突っ込みどころが多いですが、その辺はご容赦ください。

第一話・女子大生殺害事件（1）

「すいません。毛利探偵はいらっしゃいますか？」

入学式を終え、毛利探偵事務所でお祝いをしようとみんなで集まっているときにその女性は現れた。

「おっちゃーん！！　お客さんだぞー！！！」

「なにぃ！？　客だとぉ！！　しょーがねーなぁ、今行くぞ！」

酒宴（といっても未成年が多いためジュースだが）に水をさされたためか、おっちゃんは少し機嫌を悪くしたようだった。それでも、依頼人に野次を飛ばさなかった。

「お待たせしてしまって申し訳ありません。探偵の毛利小五郎です」

「はじめまして私、東都大学経済学部四年の新倉明恵（にいくらあきえ）と言います」

「それで、新倉さん、本日はどのようなご用件で？」

「えぇ、実はここ一週間ぐらい郵便受けに変な手紙が入ってまして……一度調べていただこうと思いまして」

「それで、その手紙というのは？」

「これです」

女性は持っていたバッグの中から七枚の封筒を取り出した。封筒は

切手を貼っておらず、宛先や差出人も書かれてはいなかった。

「封筒は封が切られてませんなぁ、失礼ですが中を見させていただいても？」

「構いません」

女性は何も書かれていない封筒が気味悪くて開けなかったそうだ。おっちゃんが許可を得て慎重に開封する。

中から出てきたのはバラバラのホワイトパズルのピースだった。おっちゃんが次々封筒を開封していく。アナグラム、数式、クロスワードパズル、アルファベットと共に書かれた傘の絵、夏だけ抜かれた枕草子の一節、どれも不思議なものばかりだった。

「おや？　この封筒だけ青いですなぁ、それに花の絵が書かれている……」

「ああ、それは今朝届いたものです」

おっちゃんが青い封筒を開封すると何かが落ちた。

「蕾……？」

「おっちゃん！！　封筒の中にまだ何か入ってる！」

「こ、これは！！」

青い封筒の中から出てきた紙には『頭を使え。さもなくば、私は必ずや殺しに参ろう』と書かれていた。

完全な殺人予告だった。

――――――――――――――――――――――――

「失礼ですが新倉さん、あなた誰かに恨まれるような事はありませんでしたか？」

「そうですねぇ、無いとは思いますが……でも、最近は些細な事で恨まれるとも言いますし断言はできませんよね」

「心当たりでも？」

「そういうわけじゃありませんが……」

殺人予告と分かってから、新倉さんは一気に沈んでいた。それもそうだろう、誰だって殺されそうな時にニコニコ笑ってはいられない。ただ、どうも歯切れが悪い。おそらく新倉さんはオレ達に何かを隠している。

「そうですか、となると手掛かりはこの謎の紙とパズルだけですか……」

「毛利さん、お願いします！　私を助けてください！！」

新倉さんは深々とお辞儀をして依頼してきた。
おっちゃんだってこの以来を断ったりしないだろう。だが、どうも何かが腑に落ちない。手掛かりが少ないのも、新倉さんの態度もそうだが何かが引っ掛かっている。

「では、何か分かり次第連絡します。あ、それから新倉さん、警察

に相談してください。必ずです」

「はい。ありがとうございました。私からも、何かありましたら連絡致します」

新倉さんの連絡先を聞いて一旦は別れた。
おっちゃんはソファーに座ると散らばったホワイトパズルのピースを集めはじめた。

「おいコナン！！　すまんがお前も手伝ってくれ！！　今はこの手掛かりから事件に迫るしかない」

おっちゃんはとある事件以来オレに頼る事があるようになったのだが、それはまた別の話だ。今は目の前の事件を追う事が先決だ。

「あぁ、分かった。オレは数式とクロスワード、枕草子と傘の絵を考えるから残りはおっちゃんに任せるよ」

この腑に落ちないところが多い事件、まずはこのパズル達を解かない事には先へ進めないだろう。
おっちゃんとオレは食い入るようにパズルを解きはじめた。

第一話・女子大生殺害事件（1）（後書き）

本当はアルファベットと共に書かれた傘の絵じゃなくて、法則性の問題にしたかったんですが、表現できずあえなく断念しました……申し訳ありません。

ですが、読んでいただきありがとうございます。こんな駄文でよろしければお付き合いください。

第二話・女子大生殺害事件（2）（前書き）

相変わらずひどい文章ですが、お付き合いいただけたら幸いです。

第二話・女子大生殺害事件（2）

その後、お祝いどころではなくなってすぐにお開きとなった。

そして、オレとおっちゃんはパズル達を解き終わった段階で頭を抱える事となった。

「ホワイトパズルには文字が書かれていて組み立てたらカタカナの『ツ』が出てきた。アナグラムの方は『缶』が浮かび上がった」

「数式は解くと『４ｘ＾２＋３ｙ』になってクロスワードは『鎧袖一触』、枕草子は多分『夜』で傘の絵は英語で『ｕｍｂｒｅｌｌａ』だとしても何が何だかさっぱり分からない」

答えとおぼしきモノは出てきたが、これが何を意味するのかまったく分からない。

分からないのは青い封筒に関しても同じだ。かろうじて『コスモス』の花が描かれている事は分かったが何を意味するのか分からない。手詰まり状態だった。

「この夏が抜けた枕草子の『夜』が犯行時間を表しているなら話は進むんだが、一体どうなってんだ？　犯行時間とまではいかないでも日にちだけでも分かれば……」

おっちゃんがそう言った時、腑に落ちなかった何かが分かった。

堂々とした殺害予告なのに日にちすら書いていなかったのだ。

「おっちゃん、もしかしたらこれ犯行の日付かもよ」

「犯行の日付だぁ！？　なんでわざわざんなもん送り付けてんだよ！」

「でも、そう考えれば最後の挑発的な文も納得できる」

「な、なるほど……」

しかし、これらが犯行の日付を表しているのだとしても結びつける手掛かりがない。

なんとかして結びつけようとしているとふと甘い香りが漂ってきた。

「お父さん、コナン君、紅茶でも飲んで一息ついたら？　もう夜よ？」

蘭が紅茶を持って入って来た。気がついたらもう夜だったようだ。

蘭が持ってきた紅茶はレモンティーでさっきの甘い香りとは違った。

だとすればさっきの甘い香りは……？

「あっ！！　ムーンライトフレグランスだ！！」

蘭がおっちゃんの机の上で何かを見つけたようだ。

「なんだ、その、ムーンライトなんちゃらってのは」

「ムーンライトフレグランスよ。昼間は閉じていて夜になると花びらが開く赤い花よ。この時期がちょうど咲く季節だし」

おっちゃんとオレは顔を見合わせた。どうやら二人とも同じ考えにたどり着いたようだ。「なるほど、そういうことだったのか！！」

「赤い花は鮮血を表すモチーフ」

「夜に花開く事から考えて」

「「犯行時刻は夜になってから！！！」」

やはりこのパズル達は犯行の日付を示唆するものだ。しかも、この犯行予告は挑戦状でもあるようだ。

クソッ！！　いつだ？　一体いつを表しているんだ？

「頭を使え……頭……頭文字……そうか！！」

なるほどな！　やっと分かったぜ、犯行日が！

「おっちゃん、これ『４月８日』だ」

「どういう事だ？」

「カタカナの『ツ』が描かれたパズル、『缶』が浮かび上がったパズル、枕草子の『夜』、傘の『ｕｍｂｒｅｌｌａ』、クロスワードの『鎧袖一触』、数式の『４ｘ＾２＋３ｙ』、これらをオレ達は紙に書かれた通り『頭を使って』考えた。だが、この紙に書かれた『頭を使え』にはもう１つの意味があった……」

「もう１つの意味だと！？」

「そう、『頭文字』だよ。『頭を使え』というのは、挑発の意味だけでなく『頭文字も使え』という意味でもあった。そうすると、『ツ』『カ』『ヨ』『Ｕ』『ガ』『４』がそれぞれの頭文字となる。アルファベットの『Ｕ』はローマ字読みで『ウ』に変換、そして並

べ替えると『４ガツヨウカ』、４月８日になるってわけだ」

「おいおい、４月８日ってったら……明日じゃねーか！！」

おっちゃんは慌てて新倉さんに電話をかけた。

「あぁ、もしもし！　毛利です！　新倉さん、分かりましたよ！犯行日時がね！！」

『え！？　本当ですか！！』

「ええ、詳しい事は後で説明致します。それで新倉さん、明日の御予定を教えてはいただけないでしょうか？」

『明日ですか？　明日は大学のサークル仲間と温泉に行こうって言っていて』

「でしたら、申し訳ありませんがキャンセルしていただけないでしょうか？」

『それが実は……安く済まそうと言って夜間高速バスに乗っているんです』

「なんですってぇ！！」

おっちゃんはその後、明日どのように落ち合うか段取りを決めて、電話を切った。

「マズイぞ、新倉さんは今青森の温泉に行ってるそうだ」

その後は大慌てで宿とレンタカーを予約し、荷物をまとめ明日に備えた。

第二話・女子大生殺害事件（2）（後書き）

表現する文章力がなくて暗号も変な感じになってしまいました……
もう少し頑張ろうと思います。

第三話・女子大生殺害事件（3）

翌、４月８日（土曜日）
オレ達はおっちゃんの運転するレンタカーに乗って一路山形県を目指していた。
おっちゃんが道を間違えないように、横で道案内をする。最近ではよくある光景だ。
新倉さんとの待ち合わせは午後２時、現在時刻が午前５時３０分、ギリギリ間に合う程度だ。今、ちょうど外環道に乗ったところだった。

「なぁ、どう思うこの手紙」

おっちゃんが表情を引き締めて言う。昔とは比べものにならないぐらい力の入った顔だった。
オレが成長したようにおっちゃんも成長していた。ハズレ刑事毛利の面影はだいぶ薄れ、名実共に名探偵になっていた。
そしてオレもおっちゃんと同じように表情を引き締める。

「あぁ、色々と妙なところがあんな」

そう、なぜあんなに面倒な手紙を寄越したのか。最後の挑発的な手紙も他の手紙から日時を引き出すための布石だった。しかしそんな事しなくたって明日、と言って一通だけ出せば事足りるはずだ。
さらにもう１つ、妙な点がある。なぜ犯行声明を送って来た人物は最後の手紙をコスモスの描かれた青い封筒に入れたのか。コスモスはどこにも関係ないと、結論づけた。それこそ一晩中考え抜いた。
頭を使って、だ。
その旨をおっちゃんに伝えるとおっちゃんも同じように考えていた

そうだ。

「となると、これは警察への挑戦状かもしれんな」

警察にはトレードマークである旭日章、つまり桜の代紋がある。あの桜は春の桜だ。それに対してコスモスは漢字で書くと『秋桜』、つまり警察のシンボルである春の桜の反対というわけだ。だから、警察への挑戦状という推理だ。

「だが、そうだとしても一つだけ納得できないものがある。あの、青い封筒、青いのに何か意味はないのだろうか？」

あの青い封筒だけはどうやっても説明がつけられない。

気晴らしと栄養補給のために高速に乗る前、コンビニで買ったおにぎり（梅）を頬張る。梅の酸味で頭が少しシャッキリした。少し口の中がパサついていたのでお茶でおにぎりを流し込む。一息つく頃には外環道から東北道への入り口である川口ジャンクションに着いていた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

目的地に着いた時はまだ時間より３０分早かった。段取りだと、先に店に入って偶然の出会いを装うというものだ。

店に入るとおっちゃんとオレの間に緊張が走る。

「あれ？　毛利さんじゃないですか！！」

新倉さんはなんとオレ達より先に店にいたのだった。オレは努めて冷静を装い偶然の『ふり』をする。

「あれぇ？　新倉さん、何でこんなとこにいるんですか？」
それはもう、本心からだった。向こうが先にいて、後から来た方に声をかけるなんて、偶然を装う意味がなくなる行為だ。
「明恵？　その人達は？」
「あぁ、申し遅れました。私は毛利小五郎と言います。東京で探偵をしております」
「僕は江戸川コナンって言います。毛利探偵の下で働いている探偵です」
「へぇ、あの有名な毛利探偵事務所の方々ですか。うれしいなぁ、こんなところで会えるなんて！！！」
新倉さんの連れであろう一人の男性が嬉しそうに笑っていた。男はそのままこちらに近づいて来ると握手を求めてきた。
「僕は東都大学教育学四年の平沢仁志（ひらさわひとし）って言います！！」
そして、平沢と名乗った男は振り返り仲間の紹介を始めた。
「こいつは里谷純平（さとやじゅんぺい）東都大学経済学部の四年」
紹介された里谷という男は気だるそうに「どうも」と返してきた。
「そして、向こうの席に座っているのが、米良武彦（めらたけひこ）同じく東都大学経済学部の四年」

米良という男は表情を崩さず一瞥しただけだった。

「ははは、無愛想ですがイイヤツなんですよ」

「で、奥にいる彼女が笹原みなも（ささはらみなも）、東都大学教育学部の三年です。その隣に居るのが塚本真由美（つかもとまゆみ）、同じく東都大学教育学部の三年です」

二人の女性は微笑んで「よろしく」と返してきた。その様子を見ておっちゃんは鼻の下を伸ばしていた。

おっちゃん、そこは変わらないのな……

「どうです毛利さん？　これから僕らと観光でも」

その後、オレ達は新倉さん達と共に観光し宿にたどり着いた時は午後４時を過ぎていた。

「おや、泊まる宿も一緒なんですか？　奇遇ですねぇ！！！　どうですか、夕食の時一杯？　もちろん、酒の肴は毛利探偵の話で」

この平沢という男はおっちゃんの大ファンで観光中もしきりにおっちゃんに話かけていた。

他にも、笹原さんが左利きだったり米良さんの右目が生まれつき見えなかったりと分かった事が幾つかあった。

「いいですなぁ、一昨年起きた強盗の時の話でもしながら飲みましょう！！！」

……おっちゃん、本当に大丈夫か？！

不安要素を残しつつも、日は暮れていった。

第三話・女子大生殺害事件（3）（後書き）

ビミョーな終わりになってしまいました。
いよいよ次回は事件編です！！！お楽しみに（笑笑）

第四話・女子大生殺害事件（４）（前書き）

やっぱり事件は書きにくいですね。
コナン・ドイルや青山先生の偉大さを改めて実感しました。
＊重要な改稿をしました。

第四話・女子大生殺害事件（４）

「いやー、風呂上がりのビールは最高っすなぁ！！」

午後６時半、夕食開始早々酒を飲んでいるおっちゃんだった。せめて泥酔しない事を祈ろう。

「ごめーん！！　遅くなっちゃって！！」

「いやー、遅れてしまってすまない！！　予定よりも釣りが伸びてしまって」

ちょうど夕食が始まった直後だった。

大きなクーラーボックスを抱えた男と、釣竿を抱えた女が食堂に入って来た。

「まったく、先にチェックインしといたからいいようなものを……」

「悪い悪い、いつの間にか日が暮れちまっててさ。　おや、そっちの方は？」

クーラーボックスを引っ提げた男が荷物をおろしこちらに近づいて来た。

その時、おっちゃんに気づいたようだった。

「ああ、私は毛利小五郎と申します。東京で探偵をしております」

「あの有名な名探偵毛利小五郎さん？」

「ええ、まぁ……」

「へぇー、こんなところで出会えるなんて奇遇だなぁ。あ、ボク、高橋龍太（たかはし　りょうた）って言います。よく『りゅうた』って間違えられ易い名前っす」

「すごーい！！　本物の名探偵だ！！」

いつの間にか女も持っていた釣竿を置いておっちゃんのすぐ側まで来ていた。

「私は佐藤実夏（さとう　みか）です！！　お会いできて光栄です！！　毛利さん」

「いえいえ、こちらこそ！！　こーんな、美女達に会えて幸せっす！」

ははは……おっちゃん、もう酔ってるな。

「そういえば、お二人は今日どちらに居らしたんすか？　観光の時は一緒じゃなかったと思うんすけど？」

「いえ、ボクと実夏は川釣りにね。ボクは大の釣り好きでして、この辺は隠れた釣りの穴場だと聞いて1日中釣りをしていたんです。もっとも、釣った魚もほとんどリリースしましたけど」

高橋さんが照れくさそうに笑った。おっちゃんはその間も酒を景気よく煽っていた。

「毛利さん、そろそろこの間の事件の話、聞かせてくださいよ！！」

平沢さんが待ちくたびれたようにおっちゃんに言った。おっちゃんは気をよくしてこの間起きた強盗事件について話出していた。

「ふん、おめでたいモンだな名探偵だかなんだかしらねーが、酒呑んで酔っ払って仕事の話なんかして、緊張感が足りない。なぁ、坊主、お前はどう思う？」

里谷さんも酔っ払ってしまったらしい。顔を赤くして毒づいてきた。

「酔っ払いだけは、勘弁ですかね？」

「ふぅん、よくも悪くも毛利探偵事務所の中学生探偵ってか？」

それきり、里谷さんは口を開かず黙々と酒を飲みふけってしまった。

「コラァー、タカハシィー！！　どこまで進んだのかいい加減吐きなさいよぉ！！」

「ちょっと、みなも！！　あんた飲み過ぎだよ！」

向こうでは笹原さんが泥酔して管を巻いたいた。

それをなだめる新倉さんが少々哀れに思えた。

「オラァ、タカハシィ！！　まだ話は終わってないぞー！！」

みなもさんは新倉さんと塚本さんにつれられて部屋へ戻って行った。

「高橋さん、進んだとは？」

「あぁ、新倉との関係ですよ！　こいつ、新倉の彼氏なんすから！」

「やめろよ、そーゆーの。恥ずかしいだろ」
その後、おっちゃん達は旅館の人に怒られるまで飲んで騒ぎ続けた。
「ったく、おっちゃん飲み過ぎだっつの」
「めんぼくありましぇーん」
完全に酔い潰れたおっちゃんを部屋へ運んでいる時、先に部屋へ戻っていた笹原にと出会った。
「あら、江戸川君、だったよね？」
「えぇ、どうしたんですか？　こんな時間に」
「ちょっと、酔いを醒ましに温泉にでも入って来ようかと思ってね。あれから、真由美達に飲み過ぎだーって怒られちゃって」
笹原さんはバツが悪いという顔をして去って行った。
「すいません、みなも見ませんでした？」
次の角を曲がったところで今度は新倉さんとばったり会った。
「えぇ、さっき温泉に入るって言ってましたよ」
「えぇ！？　温泉？　あれほど酔った時は入るなって言ってたのに！！」

新倉はありがとうございますとお辞儀をすると温泉に向かって走り去って行った。

「うぃーー、オレはねまっしゅ！！」

部屋に着くなりおっちゃんは布団被って寝てしまった。

まったく、自分が何しに来たのか忘れてるんじゃないだろうか？

オレは思案したが、時間は既に午前０時を過ぎていて、犯行予告を過ぎていた。それに新倉さんとはさっきばったり会っている。

妙だと思いつつも、いつしか眠りの世界へと誘われてしまった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「あーー、あったまいてぇーー……」

おもいっきり二日酔いになったおっちゃんはフラフラとした足取りで温泉へと行ってしまった。

「あ、おっちゃん！！　着替え忘れてるって！」

着替えも持たずに出ていったおっちゃんを追いかけると汗だくの高橋さんに出会った。

「おはよう！！　君も朝風呂かい？」

「いいえ、毛利探偵が着替えを忘れて行ってしまったので届けようかと」

「そういえば、毛利さんともすれ違ったな、じゃあ、またね江戸川

君」

「キャァァァァァ！！！！」

高橋さんと別れておっちゃんを追いかけようとした時だった。絹を引き裂くような声が旅館に轟いた。それはまさに悲鳴。

「今のは！！？」

「女湯からだ！」

オレと高橋さんは駆け出した。

「どうしたんですか！！？」

おっちゃんと合流して駆けつけ、風呂場に新倉さんが倒れているのを見つけた。

「明恵！！」

「ダメです入っては！！」

駆け寄るとする高橋さんをおっちゃんが制止する。そのすきにオレは新倉さんの脈を測った。

「ダメだ、もう……亡くなっている」

殺人予告、此処に完遂。

クソッ！！誰が一体こんなことを！！

第四話・女子大生殺害事件（４）（後書き）

悲鳴って、文字にすると陳腐ですね

第五話・女子大生殺害事件（5）（前書き）

不定期連載！！
長いこと間を開けてしまいました……
それでは事件の捜査編スタートです。

第五話・女子大生殺害事件（5）

「死亡推定時刻は現場が浴室でしたので正確には分かりませんが、大体午前3時から午前6時の間、死因は後頭部を強く打った事による脳座礁ですね。浴槽の淵にある石にぶつけたモノと思われます」

その後警察を呼び、現場検証を始めた。

遺体は後頭部から出血しており、その血が浴槽の淵にある石に付着し凝固している。

「警部！！　血の着いたタオルが浴槽から見つかりました。やはり、石に頭をぶつけた時に落ちたものかと」

端の方に血が付着したタオルを鑑識が発見したと若い刑事が報告に来た。警部と呼ばれた細身の中年男性は軽く思案すると口を開いた。

「うーむ、となると事故死だなこりゃ」

「待ってください警部殿、これは他殺です」

警部が出した結論におっちゃんが異を唱えた。なるほど、おっちゃんも気づいてたワケだ。

「ん？　あ、あなたは毛利探偵！！？　申し遅れました！　私、山形県警警部の麻生です！！　して、他殺というのは何故でしょう？」

おっちゃんがオレに目配せする。それに合わせて警部さん達もこちらを向いた。オレはおっちゃんにアルモノを渡した。

「これです。被害者である新倉明恵さんは昨日、私のところに妙な郵便物が届くと言って相談に来ていたんですよ。もちろん、警察にも言うようにと言っておきました。だから今回のことは……」

それを見た瞬間、警部達の顔色が変わった。

「おい！　すぐに警視庁に連絡だ！！　新倉明恵について洗え！！　しかし毛利さん、殺害予告が来たからって他殺とは限らないでしょう？」

いくらなんでも短絡的すぎゃしませんか、と警部が懐疑的な視線をおっちゃんに送っていた。

一瞬、おっちゃんが怯んだ。どうやら、気づいていなかったようだ。ったく、しゃーねーな、助け船出すか。

「いえ、これは間違いなく他殺ですよ警部」

「き、君は！！　小学生探偵の江戸川君！？　君までいるのか！！？」

警部は心底驚いたのか、すっとんきょうな声を上げた。

「警部、僕は昨日から中学生です。小学生探偵は勘弁してください」

オレが照れたように苦笑いすると、すまないと警部は素直に謝罪した。

「それで、他殺という根拠は？　それに他殺だとしたら凶器は？」

「その答えがこれです」
警部の前に現場に落ちていたタオルを差し出す。
「タオルがどうしたというのだね??」
「なぜ、血が付いてると思います?」
「それは、被害者がアタマにタオルを巻いていたからじゃないのかね??」
オレの質問にたいして、警部は少し困ったようにそう答えた。
「だとしたら変だと思いませんか?」
「どういうことだね??」
オレはわざと回りくどい言い方をする。おっちゃん、早く気づいてくれよな。
願いが通じたのかおっちゃんがハッとした。
「血のついた位置ですよ、警部殿」
そうそう、そうだよおっちゃん。
「そう、アタマにタオルを巻いていたなら血が片方の端だけにつくことはありません。アタマにタオルを巻きつけると後頭部はタオルの中央付近をあてがうはずです」
「それは、被害者が逆に巻いただけじゃないのかい?」

「いえ、だとしたら重なる部分か結ぶ部分ができるはずです。だが、タオルには結んだ様子もない。つまり、本来ならあり得ない位置に血が付着しているんですよ。これは」

警部は納得したように大きく頷くと部下に指示を飛ばした。

「うーむ、なるほど。よし！！　付近を捜索しろ！！　何としても凶器を見つけ出すんだ！！」

他殺の線が浮上したことにより、別室に待機させてある明恵さんの友人達に疑いの目が向けられる事となった。
そのため、オレ達は彼らのアリバイ確認をしに別室へと向かった。

「警部さん！！」

部屋に入って来たオレ達に気づいた高橋さんが勢いよく食いついてきた。

「ああ、座ったままで結構です」

警部はそれを制すると自らも椅子についた。

「落ち着いて、よく聞いてください。今日未明、新倉明恵さんは何者かによって殺害された可能性が出てきました」

「そんな！？」
「うそだろ！？」
「なんで明恵が！？」
「……」

警部の言葉を聞いた皆の表情が固まった。思わず泣き出す者までいた。

「そこで、我々警察はあなた方に聞きたいんですよ。死亡推定時刻にどこで何をしていたのかを、ね」

明恵さんが殺されたと聞いたショックからか、誰からも声が聞こえない。それに、警察が自分達を疑っているのも気がついているのだろう。全員の表情が固い。

「では、第一発見者の笹原さんからお願いします」

「私は、6時頃起きて朝風呂に行きました。そこで、明恵を見つけました」

「それまでは何を？」

「部屋で眠ってました」

「それを証明する人は？」

「いません」

「そうですか。では、次は平沢さん」

「私は、部屋でずっと寝てました。それで、起きてきたら何か騒がしかったんで来てみたら……」

「では平沢さん、その寝ていたということを証明できる方はいませ

んか？」

「米良と同室ですけど……それじゃぁ、ダメなんですよね？」

「ええ、残念ながら。では、里谷さん。お願いします」

「オレは、その時間はまだ寝てたな。それで、５時半頃、朝風呂に入りに行きました。中で高橋と鉢合わせたんスけど、高橋が先に出たんス。それで、しばらく風呂入っていたら悲鳴が聞こえて来たので慌てて駆けつけました」

「では、あなたも犯行時刻にアリバイは無いんですね？」

「そうなりますね」

「では次に米良さん、犯行時刻どちらに？」

「私も部屋で眠っていました。６時ちょっと前に起きた時には誰もいませんでした」

「となると、米良さんもアリバイは無いと。えー、佐藤さんあなたは？」

「私は、５時ぐらいに起きて少し散歩に出てました」

「その時、怪しい人物を見ませんでしたか？」

「いえ、見てませんけど……」

「塚本さん、あなたは？」

「私は、今の今まで寝てました」

「うーむ、誰一人としてアリバイが無いのか……」

その時、一人の刑事が入って来た。警部に凶器が見つかりませんというと、去っていった。

「申し訳ありませんが、身体検査をお願いします。凶器がまだ見つかっていないんでね」

そういって警部は、全員の荷物を調べ始めた。

「平沢さんの荷物は、着替え、洗面用具、パンフレット……ん？この包みは何です？」

「それは陶器の置物ですよ」

「これなら十分凶器になりそうですが」

「きょ、凶器って警部さん！　私は犯人ではありません！！」

「一応、ルミノール反応を見させていただきます」

「米良さんの荷物は、着替え、洗面用具、パンフレット、ほぉ鉄アレイですか。これは何キロですか？」

「十五キロです。日課でして、これを持って鍛えるようにしてるんです」

「これも、ルミノールを」

「えーと、里谷さんの手荷物は、着替え、洗面用具、それに部屋に置いてあった荷物を合わせてもこれだけですか？」

「ええ、あまり余計なモノは持ち歩かない主義なので」

「高橋さんの荷物は、着替え、洗面用具、クーラーボックス、部屋に置いてあった荷物は、釣竿に釣り餌、二リットルのペットボトルですか」

「はい」

「何故風呂場に行くのにクーラーボックスを？」

「風呂上がりに飲み物を沢山買って帰ろうと思ったんですよ。ほら、中に缶が沢山入っているでしょう？　このドリンクは缶でしか売ってないんです。だから、クーラーボックスに入れようと思って。それに、缶や氷に紛れて凶器なんか入ってないでしょう？」

男性陣の身体検査を終えて待ってると婦警さんに連れられて女性陣が帰ってきた。凶器はなかったそうだ。

「ふーむ、誰の荷物にも、体にも凶器は無かった……あぁ！　もう、どうなっとるんだ！！」

（窓は開いていたから外部からの侵入は容易、しかしその時間の不審者は目撃されていない。それに旅館の防犯カメラには彼らしか映っていなかった……）

高橋さんが半ば呆れたように言う。

「警部さん、もういいでしょう？　僕らのなかに犯人はいないってわかったんでしょ？　いつまでもこんな格好じゃいられませんし、着替えさせてくださいよ」

「あー、いや、もう少し待っていてください」

高橋さんの発言に言葉を濁す警部。確かに、凶器が見つからない以上彼らを犯人とは言えない。

「警部さん！！　凶器は見つからなかったんでしょう？　なのに、まだ私達を疑っているんですか？！」

笹原さんが声を荒らげる。無理もない。友人が殺されてショックだったはずだ。そこに畳み掛けるように、自分達の中に犯人がいると疑われたらたまったものではないだろう。

（だが、待てよ、侵入できないって事は脱出もできなかったって事だ。となると、内部の人間の犯行……じゃぁ、やっぱりさっき変な言動をしたあの人が犯人か、しかし肝心の凶器も、証拠もない……）

そんなとき、一人の刑事が入って来て警部に告げた。

「警部、現場に落ちていたタオルに奇妙な点が」

「奇妙な点？」

「それが、ついてないんですよ被害者の頭髪が」

（なるほど、そういうことか！！　分かったぞ！！　新倉さんを殺害した方法が！！　それに犯人は証拠をまだ身に付けている）

第五話・女子大生殺害事件（5）（後書き）

次回はいよいよ完結編！！
でもやっぱり、犯人モロ分かり？？　トリックに無理がある？？
次の事件からは気を付けます……
この事件が終わると本編スタートになります実はｗｗｗ
それでは、また次回お会いできる事を楽しみにしております！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5735v/

名探偵コナン~中学生の名探偵~(仮)

2011年10月19日17時44分発行